ハバーマスの社会文化的生活世界概念と社会文化のプログラム

谷　和明

「けれども困難は、ギリシアの芸術や叙事詩が特定の社会的発展形態と結びついていることを理解する点にあるのではない。困難はそれらのものがわれわれにたいしてなお芸術的な愉しみをあたえ、しかもある点では規範として、到達できない模範として妥当するということを理解する点にある。」

（カール・マルクス『経済学批判序説』）

はじめに

「生活文化といふのはこの頃多少目につくやうになった新しい言葉である」①。三木清は六〇年近くも前にこう述べたが、主語を置き換えればこれは私たちが探求の主題として着目する社会文化にそのまま妥当する。そして、生活文化が今日なお「意味的に成熟しきれていない言葉」②に止まっていることを思うならば、社会文化に関する暫定的な合意形成ですら容易でないことは明らかである。一一月の社会文化学会設立集会でも、研究の対象や方法が定まらないまま、勝手なお喋りの場となり、分解していくのではないかという危惧が出された。

とはいえ、敢えて「現代の諸現象を社会文化現象として捉え相対化する学問的共同作業」を提起したことに関していえば、わたしたちはいわば歴史的な必然性を持ったものだと確信している。本稿では、いささか我田引水的かもしれないが、「社会文化的事実の総体」としての「社会文化的生活世界」を探求することを現代の課題として強調したJ.ハバーマスの社会文化観を考察し、社会文化研究の方向性を探る糸口としたい。

一、　社会文化

社会文化という表現自体は、日本でも、既に戦前から散見される。社会と文化を連接することはさほど不自然ではないから他言語でもこのような用例はあったと想定できる。

理論的に意識された用法としては、米山会員によれば、「一九五〇年代のアメリカを代表する文化人類学者」ジュリアン・H・ステュワードが「社会文化的統合の諸水準Levels of socio-cultural integration」を重要な「操作概念」として提起しているという③。社会文化概念は欧米圏では、社会文化的（socio-cultral（英）、socio-culturell（仏）、soziokulturell（独））という形容詞形で、文化人類学から社会学や文化研究などに広がっていったのであろう。七〇年代に入ると、ヨーロッ

パ評議会レベルでの教育・文化政策論議でも「社会文化的」が革新的、民主的方向性を示す形容詞として使用されるようになった[4]。その影響下で、ドイツでは大文字で始まる「社会文化Soziokultur」という概念が、新しい文化政策・文化運動のスローガンとして主題化されるに至るのである。

ドイツのこの「社会文化」概念は、H・マルクーゼ(Marcuse, Herbart)の「現状肯定文化affirmative Kultur」批判を介して、現状肯定的（＝非社会的）でない文化として提起されたのであるが、実はその少し前に、やはりマルクーゼによる「テクノロジカルな合理性」の支配に対する批判を敷衍しつつ、後期資本主義社会の把握における「社会文化的」な視点の根本的重要性に着目した論者がいた。ほかならぬJ・ハバーマス(Habermas, Jurgen)である。一九六八年にマルクーゼの古希記念論文として執筆された「＞イデオロギー＜としての技術と科学」において、ハバーマスは社会を「目的合理的行為のシステム」と「記号に媒介された相互行為」を支配する「制度的枠組」とに区別し、後者を「社会文化的生活世界die soziokulturelle Lebenswelt」[5]としている。そのうえで、現代の人間＝社会の病理を、目的合理行為の＞イデオロギー＜である「技術至上主義」が社会文化的生活世界に侵入し、その結果「社会的生活世界に関する文化的自己了解」(傍点筆者)が困難となる事態だと把握した[6]。そしてこの社会把握が、八一年の主著『コミュニケイション的行為の理論』において、経済や行政のシステムによる「生活世界の植民地化」という周知のテーゼとして定式化される。

二、社会文化的生活世界

ハバーマスは社会（ゲゼルシャフト）をシステム的・物質的連関に還元する立場と意識的・文化的な生活世界に還元する立場の双方を批判し、システムと生活世界という二重性において社会（ゲゼルシャフト）を捉えようとする[7]。そこで鍵となるのが、生活世界を単なる文化的な次元としてではなく、社会の一側面（領域）として、すなわち「社会文化的」な次元として把握することである。彼は「社会文化的現象」「社会文化的出来事」「社会文化的変遷」「社会文化的発展」といった表現も使用しているが、これら「社会文化的事実の総体die Gesamtheit soziokultureller Tatsachen」（四二頁）に関わるものとして把握された生活世界が「社会文化的生活世界」である。それは、文化主義的に矮小化された現象学的生活世界概念にハバーマスが対置する「コミュニケイション論的生活世界概念」（二九頁、五一頁）を、「素人的概念」「日常概念」として「直観的」（四二頁）に表現するものである。

社会文化的生活世界概念は、社会文化的事実の総体を直観的に示すものとして、社会理論の「出発点」（四二頁）を提供する。ハバーマスはさらに、「生活世界」と「コミュニケイション的行為」とが相互に「補完概念」の関係にあるとする（一七頁、五一頁）。これは両概念がマルクスのいう具体と抽象の関係にあることを意味しよう。つまり、マルクスが「物質的生産」という具体的現実を「出発点」にして社会理論の基本概念としての「労働」を抽出したように、ハバーマスは「社会文化的生活世界」という具体的現実を出発点に、「コミュニケイション的行為」を抽出したのである（四二七～九頁参照）。労働からコミュニケイション的行為へのパラダイム転換は社会文化的生活世界を参照しつつ遂行されたのであり、その意味で、社会文化的生活世界は社会理論の「根本概念」（五一頁）なのである。

物質的生産＝労働とは異なる、もうひとつの現実。それは具体的には、議会、法廷、言論界、家庭、地域、市民団体などを舞台とした公共生活と私生活の領域である。これをマルクスは意識形態、上部構造（に過ぎない）としたのであるが、ハバーマスは社会文化的生活世界だと規定し、これこそが現代人の切実な現実だとするのである。では、社会文化的とは何を意味するのか、それをハバーマスによる行為および社会の二側面の区分に即して簡単に見ておこう。

人間の行為には目的実現を志向する目的論的側面と当事者間の相互理解や合意を志向するコミュニケイション的側面の二側面がある（二九頁）。後者の側面が主導的な行為からは、行為者相互が意識的・人格的に関係しあう「社会的統合」が形成される。他方、行為が目的論的に一面化すると、行為者は相互に他者を目的実現のための道具(人的資源)とみなす関係に入り、各人の意識を超えて貫徹する「システム的統合」によって規制されることになる（一五頁参照）。家族、近隣社会、自由結社、公共圏などは社会的統合の典型（優勢な関係）であり、経済組織や行政組織などはシステム統合の典型（優勢な関係）だといえよう。社会はこの二種類の統合が表裏をなして重層的に絡み合って形成している。

ところが行為の当事者、つまり「参加者」の視点からは、システム的統合が見えないので、社会は社会的統合だけで形成されたものとして把握される。この社会的統合に基づく社会が生活世界である（一五頁）。社会的統合とは、行為者が生活世界に蓄積された学問、道徳、芸術、宗教、慣習等々を学びつつ、相互に表現、解釈、了解することを通じて成立する関係である。行為者が利用できるこの「知のストック」（四四頁）を、ハバーマスは「文化」という。社会的統合は文化により可能となる。つまり生活世界とは「文化的自己了解」が不可欠な「社会的」生活世界として、「社会文化的」生活世界なのである。

他方、行為の非当事者、すなわち外部の「観察者」の視点からは、社会的統合を形成している

行為者の解釈や了解は理解できない。だから、社会（ゲゼルシャフト）はシステム的統合だけで構成されているように見える（一五頁）。これがシステムとしての社会（ゲゼルシャフト）であり、そこでは生活世界も、システムを構成するサブシステムの一つとして認識される。

現代社会を観察者の視点からシステムとして見れば、経済や行政のサブシステムがますます合理的・効率的に発展・拡大し、生活世界という非効率なサブシステムに置き換わっていく事実が認識されよう。他方、これを生活世界内で行為する参加者の視点から見れば、貨幣や権力を媒介とした物質的＝非人間的な関係が便利さや効率性を武器に生活に浸透して人間関係が寸断され、他者と社会的（ソチアル）統合を取り結ぶ能力や意欲すら衰弱しつつある危機的事態として了解されよう。この両方の視点を結合したとき、事態はシステムによる「生活世界の植民地化」として把握されるのである。

以上を要約すると、「社会文化的」ということは、文化と社会的（ソチアル）統合とが行為者を仲立ちにして結合し、生活世界という社会関係(領域)を形成している事実を明示するとともに、その背後にはシステムというもう一つの社会関係(領域)が貫徹する事実を示している。そしてそのことにより、現代の社会問題が、システム、社会的（ソチアル）統合、文化、人間（行為者）の分化、発展、変質、およびそれらの相互関係の再編成として把握されることを示しているのである。

三、社会文化のプログラム

では、生活世界を社会文化的として把握したことにより、「生活世界の植民地化」にどのような対応策が提起されるのか、それを社会文化のプログラムとして要約してみる。

ハバーマスは、システムの浸入・支配が原因だからシステムを変革、打破すべしといった社会革命の戦略を採用しない。そもそも、変革(行為)への参加者の視点からは、システムはいわば不可視の領域であり、したがって意識的・直接的に制御できない領域である。生産力の桎梏となった生産関係(＝システム)を変革すれば、経済的土台(＝システム)を科学的理論の適用により直接的、意識的に制御できるだろうというマルクス主義的確信をハバーマスは否定する(三三七～八頁)。科学・技術によりシステムを支配しようとする近代の試みは、ことごとく当事者の意図を超え、巨大化したシステムによる社会＝人間の支配を推進してきたという歴史認識を、ハバーマスはマルクーゼらフランクフルト学派第一世代と共有している。

それゆえ、人間の解放のために残された領域はシステムとは別の次元でしかない。この事実をフランクフルト学派第一世代はややペシミスティックに表現したのであるが、それに対してハバーマスはこの別次元

を社会文化的生活世界として、つまりシステムに対峙する固有の社会領域として積極的に提示したといえよう。人間は生活世界を意識的・直接的に形成し、制御し、発展させることが可能であり、さらにそのことを通じて間接的にシステムの変化に影響を行使できるのである。

ハバーマスにとって、生活世界はあくまでも社会的（ソチアル）統合による社会関係（領域）であって、単なる意識や文化ではない。システムと生活世界は別種の統合原理に基づく社会の二側面（領域）であり、相互に必要条件として制約し合っている。両者は、相互の制約の範囲内で独自に変化、発展するのであり、それに応じて、制約条件も変化するのである。システムは生活世界を物質的再生産の面から制約するが、その構造を直接的に規定するわけではない。生活世界が合理化され、活力を回復すれば、それがシステムを制約する条件になるのである。むしろ、生活世界を「社会システム全体の存続を規定するサブシステム」（六七頁）と考えることもできるのである。

それゆえハバーマスは、システムの肥大化に伴って生じている深刻な社会文化的病理現象を、あくまでも社会文化的生活世界の衰弱、変質としてとらえ、その再生、合理化、活性化をめざすという立場を選ぶ。このような視点から、彼は解決すべき二つの課題を提起する。第一は、コミュニケイション的行為の領域、すなわち社会文化的生活世界を経済と行政のシステムによる物象化から防衛する「自由の制度（諸機関、諸施設）Institutionen der Freiheit」を構築すること、第二は、もはや伝統的な規範や慣習（文化）に頼ることができず、「文化的貧困化」状態にある日常実践に近代文化を「フィードバック」することである（三二〇～一頁参照）。両者は相互補完的な課題であるが、ここでは「文化的貧困化」（三一七頁）の問題をもう少し見てみる。

文化的貧困化とは、社会的（ソチアル）統合を形成するコミュニケイション行為者に不可欠な文化が欠乏しているという事実である。生活世界に文化がないのではない。文化は専門的に合理化された学問、道徳、芸術として大量に生産され、蓄積されている。また家族、地域、集団には伝承された文化（規範や慣習）がある。にも関わらず、伝承的文化は時代遅れで無力化しており、専門家文化は「カプセル化」（三二〇頁）「タコツボ化」（三二四頁）した状態にあり、行為者には疎遠で利用不可能なものになっている。「この社会は文化的に利用できる学習の潜在力を十分に汲み尽くさず、制御されないままで増大するシステムの複合性に身をまかせている」（三八七頁）のである。ハバーマスは、この文化的貧困化の原因が日常のコミュニケイション的行為からの専門家文化の「エリート的分離」（三二四頁）にあるとする。したがって、専門的、合理的に発展した文化を人々の日常生活の場にフィードバックし、伝承的文化とそれに支えられ日常のコミュニケイション的行為を活性化すること、そのために「フィードバックの条件」（三五八頁）を探求することが現代の焦眉の課題となる。

社会文化的生活世界を守る自由な制度の構築と日常生活における文化的貧困の克服、この二つの

課題を結びつけて追求すること、これをハバーマスの社会文化のプログラムと呼んでよいだろう。経済的貧困の解決をめぐる労働者階級による社会革命の戦略に代えて、彼は文化的貧困の解決をめぐる知識人と市民運動との協力による社会文化のプログラムを提起したのである。

社会文化的生活世界概念の導入による社会文化のプログラムは、社会と文化との関係をめぐってフランクフルト学派第一世代が陥ったディレンマへの回答でもある。

アドルノ、ホルクハイマー、マルクーゼたちは、一方で生活世界としての社会の日常を超越した文化のイデオロギー性(現状肯定的性格)を鋭く告発しながら、他方で技術主義的理性が支配する一次元的システムとしての社会に順応した大衆文化を批判し、システムに抵抗する最後の砦としての文化(芸術)に仄かな希望を託すことになった。つまり社会と文化の分裂を批判しながら、両者を再び関係づけるプログラムを提示できなかったのである。それは彼らが、文化をもっぱらイデオロギー、芸術として論じ[8](8)、その限りで社会への順応か、あるいは否定(超越)かという二律背反から抜け出せなかったからである。

それに対しハバーマスは、社会的統合(ソチアル)を形成する行為者に不可欠な「知のストック」として文化を行為論的に捉えることにより、文化がシステムという社会からの超越性を保持しつつ、生活世界という社会の形成を通じて、システムにも間接的に影響するという、文化と社会の積極的関係付けの道筋を示したといえよう。

四　社会文化運動

しかし、まさにここで、ハバーマスの社会文化のプログラムがどれほどの現実性を持つかということが問題となる。すなわち、社会的統合(ソチアル)とはシステム的統合という事実に対置された規範概念に過ぎないのではないか、その限りで、社会文化的生活世界といっても、結局のところ一種の規範的、理念的構想物に過ぎないのではないか、したがって、例えばマルクーゼが現実に対する否定として提示した「美的次元」[9]と同類のものではないかといった疑問が生ずるのである。

この問題をこれ以上論及することはできないが、これを検討するうえで注目すべき事実として、前にも触れたドイツの社会文化運動を挙げておきたい。というのも、この運動こそは、ハバーマスの社会文化のプログラムを具体化する試みだといえるからである。

一九六八年の学生叛乱の余波をうけて登場し、七〇年代中期以降発展してきた社会文化運動は、具体的には、オールタナティブな生活を志向する青年たちを担い手に、「社会文化センター soziokulturelles Zentrum」を設置し、「自主管理」的に運営する運動として展開されてきた。この運動の詳細については既に紹介したこともあるので[10]省略するが、経済や行政のシステムによって再開発の対象とされかかった老朽工場や倉庫の使用権を(しばしば占拠によって)獲得し、それを市民によって自主管

理された「社会文化センター」にするという戦略は、まさに「自由の制度」の構築をそのまま具体化したものである。センターでは地域住民の各層を対象とした多様な社会事業と文化・芸術・教育事業を総合的に実施することが追求されているが、これは文化による社会的統合の再生、活性化の試みである。運動のスローガンである「万人のための文化」「万人による文化」は、専門文化のフィードバックによる日常文化の活性化という目的を直裁に表現している。つまり、社会文化センターはまさに、小さいが具体的な社会文化的生活世界として構想されているといえるのである。

もちろん、社会文化運動の理想と現実の落差も指摘されている。自主管理の形骸化と運営体制の官僚主義化、実施事業の専門化と分業化、利用者層の固定化、運営の商業主義化、行政サービスの下請け機関化等々の問題が、運動の発展、拡大とともに深刻化してきているのである。社会文化センターが企業化し、経済、行政のサブシステムに取り込まれてしまっているといった批判が、当事者によってもなされている。

このような事態をも含め、社会文化運動が今後どのように展開していくかは、ハバーマスによる社会文化のプログラムの現実性を検討するうえでの試金石となるだろう。

社会文化研究の課題―まとめにかえて―

いささか性急な議論だったかもしれないが、ハバーマスにとって「社会文化的」という形容詞がシステムに対峙する社会的統合と文化との結合という意味を有すること、そして社会文化的生活世界が彼の理論構成の基本概念の一つといえることを示しつつ、社会文化的生活世界の防衛、活性化をめざす社会文化のプログラムについて素描してみた。

ハバーマスが提起した、社会文化的生活世界を防衛する「自由の制度」の構築という課題、ならびに専門文化のフィードバックによる「文化的貧困」の克服という課題、この二つの課題に関わる諸問題はわたしたちの社会文化研究においても重要な課題となるだろう。さらに社会的統合と文化との結合としての社会文化という捉え方は、社会文化研究の一つの視点となるだろう。このことを確認して、まとめにかえたい。

---

①三木清「生活文化と生活技術」『三木清全集』第一四巻、岩波書店、一九六七年、三八四頁（初出『婦人公論』一九四一年一月

②寺出浩司『生活文化論への招待』弘文堂、一九九四年、四一頁

③米山俊直・福井有編著『社会文化の諸相』大手前女子大学、一九九八年、一四頁

④ Sievers, N./Wagner, B. (Hg.); Bestandsaufname Soziokultur. Beiträge - Analysen- Konzepte. Stuttgart, Kohlhammer 1992, S.12

⑤長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊国屋書店、一九七五年、六二頁。ただし訳文は筆者の判断で適宜変更した。以下も同様である。

⑥同上書、七八～九頁、八八頁。

⑦ユルゲン・ハーバーマス著　丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場孚瑳江・脇圭平訳『コミュニケイション的行為の理論（下）』未来社　一九八七年、一六頁。以下、括弧内にページ数のみ記してあるのは、すべて同書からの引用・参照箇所である。ただし、訳文は筆者の判断で適宜変更し

⑧アクセル・ホネット著　河上倫逸監訳『権力の批判　批判的社会理論の新たな地平』法政大学出版局　一九九二年、三七、四二、八六頁。

⑨ Marcuse, H.;The Aesthetic Dimension. Boston 1978。

⑩拙訳・ドイツ文相会議文化委員会勧告「社会文化―各週による振興上の原則ならびに問題」『社会文化研究』創刊号（一九九七年）、および拙稿「社会文化―ドイツの場合」『季刊場トポス』一九九四年秋季号を参照されたい。